

内村鑑三はベンジャミン・キッドをどう読んだか —社会進化論の影響の一断面—

住家 正芳*

「2つのJ」、すなわちJesusとJapanへの忠誠を誓った内村鑑三が、第一高等中学校での「不敬事件」のように、そうしたJesusへの忠誠(宗教)とJapanへの忠誠(愛国心)との深い溝に悩まされたことはよく知られている。本稿は、宗教と愛国心との葛藤の解決を内村がどのようなものに見出していたのかを検討することによって、19世紀末以降世界的に流行した社会進化論が宗教のとらえ方にも大きな影響を及ぼしていたことを跡づけようとするものである。1861年生まれの内村が生きた時代は、ダーウィンの進化論や、スペンサーに由来する社会進化論が世界的に大きな影響力を持った時代であった。当時名を馳せた社会進化論者の一人にベンジャミン・キッドがおり、内村はこのキッドの著作に大きな感銘を受けていた。そこで本稿は、内村がキッドの著作のどういうところに宗教、進化論、愛国心という課題の解決ないしは解決の糸口を見出していたのかを検討する。

キーワード：内村鑑三、ベンジャミン・キッド、社会進化論、宗教概念

はじめに

おおよそ1990年代以降の日本の宗教研究においては、「宗教とは何か」を素朴に問うようなかたちでの本質論的な宗教研究は成り立たなくなっている。代わって論じられているのは、「宗教はどのようなものとされてきたのか」という概念の系譜学である。直接こうしたテーマを扱わない場合でも、前提的な問題意識として宗教概念の歴史性、宗教概念が歴史的な構築物であるという、当たり前といえはしごく当たり前の事柄を無視することができなくなっている。この変化は、宗教研究という分野に遅れて

やってきた言語論的転回といえ、もっぱら英語圏における動向に影響されたものでもあるが、きわめて刺激のかつ生産的な問題領域として、数多くの研究が積み重ねられてきた¹⁾。

こうした研究姿勢は、宗教という概念をひとつの言説として扱うものであり、そうである以上、宗教言説が構築される過程を明らかにしようとするものとなる。そして、宗教言説の構築過程は、宗教以外のさまざまな、それ自体も歴史的な系譜を有する諸概念との連関の過程でもある。したがって、宗教概念の研究は、宗教概念・言説の系譜という糸と、他の諸概念・言説の系譜の糸とが縋り合わさった束を解きほぐしてゆくような作業となる。

本稿は、そうした作業の一環として、宗教と社会進化論との関連を示そうとするものであ

*立命館大学産業社会学部准教授

る。そして、その具体的な対象として内村鑑三に対するベンジャミン・キッドの影響を明らかにする。

1 内村鑑三の課題

1-1 「2つのJ」

内村鑑三（1861（文久1）～1930（昭和5）年）が「2つのJ」、すなわち Jesus と Japan への忠誠を誓ったことはよく知られている。そして、1891年に起きた第一高等中学校での「不敬事件」に象徴されるように、このような宗教と愛国心²⁾との両立は現実的にも内面的にも内村に大きな課題を突きつけることとなった。

では、どういう課題を内村は突きつけられたのか。帝国大学の哲学教授であった井上哲次郎による内村への批判にその一例を見ることが出来る。井上哲次郎は、内村の「不敬事件」を題材として「耶蘇教徒は多く外国宣教師の庇蔭を得て生長せしものゆゑ、甚だ愛国の精神に乏しきなり」と批判し、キリスト教徒は愛国心に欠け、「国の統合一致を破らんとす」る存在であると攻撃した³⁾。外国からもたらされたものであるキリスト教と愛国心すなわち国家への忠誠、さらには天皇への忠誠とは相容れるものではなく、国家の統合の障害となる、というのが井上哲次郎のキリスト教批判の要点であった。

これに対して内村は「文学博士井上哲次郎君に呈する公開状」（1893（明治26）年3月15日『教育時論』掲載、全集2巻所収⁴⁾）で反駁を試みている。まず、「不敬事件」に関する井上哲次郎の記述は、内村からすればキリスト教批判に偏向した報道記事ばかりをもとにしたものであったため、事実誤認を指摘し、勅語に対して敬礼しなかったわけではないとする。そして、

勅語に対して敬礼するか否かではなく、勅語の内容を実行するかどうかが問題である。だが、現実に勅語が発布されてよりこのかた、日本の教育や道徳に何の進歩もないではないかと論じる（全集2巻129頁）。

また、井上哲次郎がキリスト教徒は外国人宣教師の影響のもとにあると難じたのに対しては、帝国大学に職を得ている井上哲次郎は「政府の庇蔭を得て生長せしもの故甚だ平民的思想に乏しきなり」（全集2巻130頁）として、その視野の狭さなどを批判する。さらに、井上哲次郎がハーバート・スペンサーに依拠していることに対して、スペンサーはその著作の中で独裁政治・君主政体をこっぴどく批判しているが、尊皇愛国を掲げるあなたのような方がそうしたスペンサーをあがめ奉ってよろしいのかと揶揄する（全集2巻131-3頁）。

だが、こうした内村の反駁は揚げ足取りにとどまるものである。井上哲次郎の批判はもちろん一方的なものであるが、日本という一つの国家への忠誠とキリスト教信仰とは両立し得るのかという問題をつきつけるものともなっている。井上哲次郎に対する、この時点での内村の反駁は、そうした問題について答えるものとはなっていない。宗教と愛国心との葛藤に対する明確な答えを、この段階での内村は提示できていなかったといえる。

1-2 愛国、科学、信仰

ところで、内村にとっての課題は「2つのJ」だけではなかった。晩年になってから札幌でキリスト教に入信した頃を回顧して以下のように述べている。

余は四十年前に、札幌に於て二三の大問題を提供

された。そして其解決を得んとして今日に至つた。其第一は、如何なる基督教が人類を救ふに足る乎、其第二は、基督教と進化論との関係如何、其第三は、日本国の天職如何等である。(1923(大正12)年11月2日付け日記、全集34巻240頁)

どのようなキリスト教が人類を救い得るのか、キリスト教と進化論をどのように両立させ得るか、日本国の為すべき使命は何か、を内村は考え続けてきたということである。そして、こうした問題の構成要素となっていたのが、先の「2つのJ」に含まれる宗教と愛国心に加えて、進化論であったということになる。内村の生涯にわたる課題は、宗教、愛国心、進化論だったのであり、さらにそれぞれをいかにして両立させるかを軸として思索を展開させたとらえることができる。

ここで進化論が出てくるのはやや唐突に感じられるかもしれないが、そもそも内村は札幌農学校の卒業時に「漁業モ亦學術の一ナリ」という演説を行い、開拓使で漁業を担当し、さらに農商務省農務局水産課で日本産魚類目録の作成に従事した人物である。20代の半ばまでは、こうした理系官吏としての人生をそのまま歩むか、伝道者としての道に踏み出すか迷い続けていたのである。

やはり晩年の回顧だが、内村は「余の特愛の科学は生物学であつた、余は当分の間は余の天職は之に在ると信じた、(中略)東洋第一の魚類学者たらんことは青年時代に於ける余の唯一の野心であつた」(「科学と考古学と神学入門」『読書余録』1909(明治42)年10月、全集16巻511頁)と述べている。

また、内村は札幌農学校卒業後の1882年1月8日、札幌YMCAの発会式で「帆立貝とキリス

ト教との関係について」と題する講演を行っており、地質学と創世記とを調和させようとしたという。そしてこの当時、「進化」とか「生存競争」とか「適者生存」とかいう語句はわれわれ仲間の口にもものぼっていた」と、進化論が一世を風靡しつつあったことを内村自身が証言してくれている(*How I Became a Christian*, 1895(明治28)年、全集3巻 57頁)⁵⁾。さらに、この講演の少し後の日付のある太田(新渡戸)稲造・宮部金吾へ宛てた手紙には「I am now very much interested in evolution.」と書かれている(1882(明治15)年1月20日付太田稲造・宮部金吾宛書簡、全集36巻29頁)。

1861年生まれの内村が生きた時代は、チャールズ・ダーウィンの進化論が世界的な反響を呼び起こしていた時代であり、先に見た井上哲次郎がスペンサーを用いていたように、スペンサーの思想やそれに由来する社会進化論が人文・社会・自然領域全般にわたる「科学」の最先端として世界的に大きな影響力を持った時代であった。

こうした中で内村は、進化論とキリスト教(科学と宗教)、キリスト教と日本(宗教と愛国心)との葛藤をいかにして解消し、それぞれを融合させてゆくかを自らの課題としたわけである。そして、その模索の中で内村自身がある著作にこうした課題の答えを見出している。それが、イギリスの社会進化論者ベンジャミン・キッドの著作であった。

内村がキッドの著作に感銘を受けていたことは、すでにこれまでに指摘されている⁶⁾。だが、キッドの著作の内容を踏まえて内村の著作への影響を具体的に指摘することは行われていない。そこで本稿では、キッドの著作から内村の著作への影響関係を検討する。そして、内村が

キッドの著作のどういうところに宗教、進化論、愛国心という課題の解決ないしは解決の糸口を見出していたのかを検討することで、19世紀末以降世界的に流行した社会進化論の影響の大きさの一端を明らかにすることとしたい⁷⁾。

2 内村鑑三が読んだ「社会学」

2-1 ベンジャミン・キッド

ベンジャミン・キッド (Benjamin Kidd 1858-1916) を知る人は、現在ではほとんどいないであろう。だが、19世紀の終わりから20世紀初めのイギリスでは、社会学者としてかなり知られた存在だった。

キッドは1858年、警官の長男としてアイルランドのプロテスタント家庭に生まれた。幼い頃から自然に興味を持ち、下級官吏として生活しながら生物学に関する論文を書いていた。30歳頃から生物学以外にも歴史、政治、経済、哲学、宗教などの分野を涉猟して書き上げたのが『社会進化論』*Social Evolution*であり、1893年に脱稿し翌年1894年にロンドンで出版された。

この『社会進化論』は英米で一般受けして大ヒットただけでなく、日本語や中国語などにも翻訳されて世界的なベストセラーとなり、キッドは文明批評家としての名声を得ることとなった⁸⁾。だが、キッドの名声は『社会進化論』が最初で最後となる。その後、『社会進化論』でも触れていた資源帝国主義的な見解をまとめた『熱帯の支配』*The Control of the Tropics*を1898年にニューヨークで出版して米西戦争の時流に乗るが、1902年に出した『西洋文明の原理』*Principles of Western Civilization*は専門家からさんざんに批判されて一般受けもなかった。1903年にはイギリス社会学会の創設メンバ

一となり、政治活動にも関与する。1911年頃から新たな著作の準備にかかるが、それが『力の科学』*The Science of Power*として出版されたのは1916年にキッドが死去した後、1918年になってからであった⁹⁾。

キッドの死から7年後、晩年に近い内村は、1923年3月26日の日記に以下のように書きつけている。

頭脳は昨日来読続けし『英百』に於けるベンジャミン・キッドのペンに成れる「社会学」の長論文に占領せられた。若し社会学とはキッドが唱ふるが如き者ならば余も社会学者たる事を拒まない。然しキッドの如き社会学者は滅多にない。夫故に社会学は嫌になつて仕舞ふのである。(1923(大正12)年3月26日付け日記、全集34巻160頁)

『英百』とは、*Encyclopedia Britannica* のことで、1910年から1911年にかけて出版された第11版にキッドが執筆した「社会学」の項目が掲載されている。内村が、もし社会学がキッドの言うようなものなら自分も社会学者になるが、キッドのような社会学者は滅多にいないと言うように、キッドの社会学理解はかなり独特のものである。以下、まずこのキッドによる「社会学」の解説を見てみよう。

2-2 キッド「社会学」

「社会学」論文¹⁰⁾の冒頭で社会学を定義して、キッドは次のように述べる。

もっとも包括的な意味では人間社会の科学と定義できるであろう。生物学を生命の科学ととらえてもよいであろうのと同じである。(p.322)

いきなり生物学とのアナロジーで社会学が語られており、現在の社会学イメージからすると突飛な感がある。だが、この冒頭の一節には、「社会」をそれ自体独立した「社会有機体」social organismとして、一つの生物のようにとらえるキッドの見方がよく表れているとも言える。また、持って回った書き方で分かったようで分からない言い回しになっている点にも、キッドの文体の特徴がよく表れている。

この後、コトによって「社会学」の語が用いられるようになって以後の経緯や、社会学の学問上の位置づけがまとめられている点は(pp.322-3)、現在の社会学イメージからしても違和感が無い。だが、論文の内容の大半が進化論と社会学の関係に割かれており、ダーウィンやアルフレッド・ラッセル・ウォレスなど、生物・博物学者の解説に紙数が費やされている。そして、進化論的見解を社会に適用した重要な人物としてスペンサーが紹介されているなど、現在の社会学イメージからは、かなりかけ離れた社会学史となっている。

この論文でのキッドの基本的な主張は、進化論を社会にも適用すべきであり、社会学とはそのような学問であるべきであるということである。したがって社会学とは、進化の過程にある人間社会の基礎となる原理を解明するものとされる(p.323)。

キッドは、こうした社会の科学の源を古代ギリシャのプラトンやアリストテレスにさかのぼるが、近代的な社会論の発展はルネサンスと宗教改革から始まるとする。その流れの中でスペンサーが登場し、「社会有機体」social organismの語を用い、その社会有機体の生命の原理として、進化論を社会に適用した人物として紹介される(p.326)。

しかし、キッドはスペンサーに批判的である。一般に、キッドはスペンサーの系譜をひく人物とされるが¹¹⁾、キッド自身はスペンサーを批判し乗り越えたつもりでいた。キッドのスペンサー批判の要点は、社会を有機体としてとらえる点に関するものである。とはいえ、キッドは社会を一つの有機体、すなわち生物としてとらえることを批判したのではない。キッドは、スペンサーが社会有機体という概念をもたらしたことを評価しつつも、有機体としての社会の把握がスペンサーでは不徹底であることを批判した。

特にキッドが批判したのは、スペンサーが社会有機体としての共同活動は社会有機体の構成要素である各部分の活動に従属させられる、とした点である。スペンサーは全体としての社会を一つの有機体として把握したが、その有機体としての社会を構成する諸要素もまた、それぞれの利益関心に突き動かされて活動しており、全体としての社会にとって不利益となることすらも引き起こすと考えていた。全体のためにその構成要素である下位集団や個人が自らの利益を犠牲にする、あるいはすべきであるとは考えていなかったのである。

スペンサーは基本的に自由放任主義者であり、そのため貧民救済のような社会福祉にも反対した人物であるが、最適者が生き残るためには自由な生存競争が不可欠であると考えていた¹²⁾。そのため、国家の利益のために個人の利益を制限して個々人の自由な競争を阻害することには否定的であった。全体のために個人や下位集団を犠牲にする考えを、スペンサーは持ち合わせていなかったのである。

こうしたスペンサーに対してキッドは、スペンサーの「社会有機体」の概念は政治的國家

political state の範囲に制限されたものであるとして、これをもっと広げるべきであるとする。キッドは、進化の過程にある社会は、社会自身の利益関心と心理や意識、法則を持つとしており (p.326)、社会を生物とのアナロジーで、より分かりやすくとらえようとしたと言える。

キッドは次のように主張する。

自然淘汰の原理が社会にも作用し、社会を構成する諸要素からより高い能率を生みだすよう促すのであるなら、自然淘汰の原理は下位集団の利益関心を社会全体のより高い能率に従属させるはずである。(p.326)

ここに出てくる「能率」や「社会的能率」social efficiency はキッドが多用する基本概念であり、後で見る『社会進化論』においても用いられている。これは、自然淘汰による競争を生き抜くためには、生物個体であれ集団・社会であれ、その競争を闘う主体には、より能率よく効率的な運営のもとでの闘争の遂行が求められる、という考えである。自然淘汰による競争を生き残るためには高度の能率が必要であり、逆に自然淘汰による自由な競争によってこそ、より高度の能率の獲得が実現する、とキッドは考えた。キッドは、上位集団としての「社会」の利益である社会的能率の向上のために個人や下位集団の身勝手な利益関心が犠牲になるのは当然としたのである。

こうしたキッドの主張からは、では「個」としての個人を「全体」としての社会に従属させるのは何か、もしくは「個」を「全体」に従属させるためには何が必要なのか疑問となる。

先に触れたようにキッドは、社会の科学の源を古代ギリシャにさかのぼるが、ギリシャ人に

とっての「社会」は「国家」state に限定されたものであり、その点ではローマ人も同じであったとする (p.323)。そして、そのような社会構造および社会論に根底的な変化をもたらしたのが西欧におけるキリスト教の拡大であったとする。

キッドは、ギリシャのような古代文明と近代文明を区別するのは個人を有機体としての社会に従属させる原理の有無であるとするが、キリスト教こそがそうした原理の伝達者であったという。「汝の隣人を汝自身の如く愛せよ」と命じるキリスト教の拡大によって、義務と責任の観念が広まったことが、有機体としての社会に個人を従属させる原理を西欧社会にもたらしたというのである。したがって、キリスト教が文明の発展にもたらした影響は計り知れないとする。また、「汝の隣人を汝自身の如く愛せよ」というキリスト教にとっての「隣人」の範囲は、家族やグループ、国家、国民、民族、人種など社会のいかなる集団をも超えたものであり、こうしたキリスト教の教義こそが社会に進化をもたらすもっとも大きな力であるとする (p.329)。

しかし、この「社会学」論文では、宗教（すなわちキリスト教）がなぜ社会進化の大きな力となるのかは説明されていない。この点については、キッドの処女作にして出世作である『社会進化論』に記述されており、内村はこの『社会進化論』にも大きく影響されていた。

3 内村鑑三が読んだ『社会進化論』

3-1 キッドの著作との出会い

先に紹介した1923年3月26日の日記は、キッドによる大英百科事典「社会学」を読んだこと

を書いたすぐ後、以下のように続く。

キリストの福音を社会進歩の最大原理と見たキッドは実に達観者である。今より三十年前彼の名著『社会進化論』を読んだ事が余が聖書研究に一生を委ぬる事を非常に助けたのである。ベンジャミン・キッドは余を深刻に感化した学者の一人である。今日に至り再び彼の文を読んで旧き先生に接するの感がある。(全集34巻160頁)

「今より三十年前」とは、1893年ということになるが、この頃、内村は大阪の泰西学館で教師をしていた。それ以前、1891年1月の「不敬事件」で職を追われ、妻も病で失って心身ともにきわめて落ち込んだ後、1892年9月になって得たのが、泰西学館での教師の仕事であった。内村はこの泰西学館で1893年4月まで働く。

後年の回想では、この大阪在住中に生物学者ジョン・T・ギュリックからキッドの『西洋文明の原理』を奨められたとしているが(1925(大正14)年8月9日付け日記、全集34巻470頁)、『西洋文明の原理』が出版されたのは1902年になってからである。また武富保は、これは『社会進化論』の間違いであろうとしているが¹³⁾、『社会進化論』の出版も泰西学館を辞めた後の1894年である。あるいは、泰西学館を辞めた後にギュリックから『社会進化論』を紹介されたのかもしれない。

厳密にいつ内村がキッドの『社会進化論』を読んだのかは不明だが、1895年10月18日付けの新渡戸稲造宛英文書簡にキッドを読んだことが書かれているので、出版後、比較的早い時期に内村が『社会進化論』を読んでいたことは間違いない。この書簡には、その読後感が興奮気味に綴られている。

そうそう、ベンジャミン・キッドの本を読んで、すごく面白かったことを言わなくては。僕が知る限り、彼の本はキリスト教国——特に英国——の強さと安定性を、僕が見た中ではもっとも哲学的に説明したものだ。我々自身の国家の将来の方針にとってなんと示唆的であることだろう。彼の本やそのほかの感銘が、これまで抱いていた古い信仰(すなわちキリスト教への信仰)にますます僕を駆り立てる。結局のところ、変わる事のない古くさいキリスト教の聖書のうちに、人間の魂の救いだけではなく国々の救いもまたあるのだと僕は思う。それほど不可欠であるにもかかわらず、聖職者になることを恥じねばならないのだろうか。政治学、経済学、科学、それらはなんと貧弱なことか。人間というのは結局のところ迷信深いもので、そして迷信のようなものだけが人間を救うことができるのだ。(1895(明治28)年10月18日付け新渡戸稲造宛英文書簡、全集36巻425頁、拙訳)

後で見ると、1895年10月のこの新渡戸宛書簡以降の時期における内村の著作にはキッドの影響をはっきりとかがうことができる。そのことから、内村はキッドの『社会進化論』をひどく興奮しながら読んだと思われる。いわば、内村はキッドに「はまった」わけである。

3-2 キッド『社会進化論』

3-2-1 進化の普遍性と理性

では、キッドの『社会進化論』¹⁴⁾にはどういったことが書かれていたのだろうか。

まず、進化の観点から社会をとらえるべきである、という基本的な発想は「社会学」論文と同じである。むしろ「社会学」論文はキッドの主著である『社会進化論』と1902年の『西洋社

会の原理』の要約となっていると言うべきであろう。

『社会進化論』において、キッドはまず何よりも進化の必然性、普遍性を強調して、「進歩 progress はまったく逃れようのない必然的なものであり、生物の始まり以来それを免れることのできたものはない」（p.37）と述べる。なお、キッドは、進化 evolution, 進歩 progress, 発展 development といった用語を厳密な定義や区別なしに使用しており、文意からは基本的にどれも「進化」のことを指していると解釈してよいと思われることが多い。こうした書き方にもキッドの特徴が表れている。キッドの書き方は、自らの主張を具体的な根拠や事例で立証するという書き方からはほど遠いもので、自らの主張を言い換えながら何度も繰り返して書き連ね続けて、いつのまにかそれが事実であるかのように扱うという、いわば雰囲気で押し切る型のものである。

進化についても同一の内容がさまざまに言い換えられるが、基本的にキッドにとっての進化は競争を意味するもの、あるいは競争と不可分のものである。そして、生命体はその競争での勝利・生き残りに自らのすべての資源を投入すべき存在として理解されている。

我々が自らの周りに見るこの整然とした美しい世界は、現在もそしてこれまでもずっと、その世界に住むあらゆる生物の絶え間ない競争——異なる種の間だけではなく同じ種の者同士の競争でもある——の舞台であった。我々の足下に生える緑の草地の草は互いに無言の競争を戦っているものであり、その競争は放っておけば弱者が絶滅するまで進むのである。こうした植物の部分、組織、あるいは特質は感嘆すべき美しさと完璧さを持つも

のだが、それらはすべてこの闘争における役割と意味を持つものであって、その闘争を勝ち残るために獲得されたものなのである。（p.38）

ここには、部分は全体の生存のために資すべきもの、というキッドの考えがよく表れている。キッドにとって、こうした競争こそが生物を進化させるのであり、そうした競争をしなくても生き残り、子孫を残すことができるようになると、生物は世代を追って退化してゆくと考えられた（p.39）。競争による淘汰が止まると、進化もまた止まるのである（p.40）。

生命の法則はその起源以来、変わることがない。すなわち、絶え間ない不可避の闘争と競争、絶え間なく逃れようのない淘汰と排除、途絶えることなく必然的な進歩 progress である。（p.41）

自然環境が生命をふるいにかけて、その自然環境に最適化したものを残すという意味での自然淘汰と、生物個体や群れ、生物種の間における競争・闘争は意味が異なり、区別されるべきものであるが、キッドは同じものとして扱っている。また、生物個体間の競争と、何らかの集合・集団としての生物の間の競争も、本来は安易に同レベルで扱われるべきものではない。しかし、キッドは生物個体と集団とを混同している。

そして、こうした競争状態における個々の生物主体の振る舞いは、自己の利害を優先し、自身の利益を最大化することを目的とした「理性的」rational な行為であると、キッドはみなす。キッドは理性・合理性を功利性として理解しており、「理性的」rational の語をもっぱら「功利的」という意味で用いている。

そのため、生物の一種である人間についても、当然、功利主義的な人間観を基礎とすることとなる。さらに、人間が他の生物に比べて理性の発達した動物である分、個々の人間はより理性的すなわち功利的に振る舞うということになる。そして、人間のように自分の属する集団の利害とは別に自分自身の個人としての利害を考える能力を備えた生物の場合、理性的=功利的に計算すれば、集団の将来的な進化や利害よりも、目の前の自分自身の幸福のほうが重要なこともある。その場合、理性のみに従うと、個人は集団の利益よりも自分自身の利益を優先させることとなる。そして、集団を構成する皆がそうすると、結果として集団の利益は損なわれ、進化は停止して、最終的には滅亡することになってしまう（pp.66-7）。キッドに言わせると、優れた文明を誇ったギリシャやローマが滅びたのは、知性面ばかりが発達して個々人の理性=功利性が行き過ぎたからだ、ということになる。

では、滅亡を避けるためにはどうすべきか。キッドのこうした書き方からは、答えがあらかじめ用意されているのは明らかである。個人は放っておくと好き勝手に振る舞って全体の利害を損なってしまうのだから、そうした個人の功利性を抑制する要素が必要だ、という話の運びとなる。それこそがキッドにとっての「宗教」あるいは「宗教の機能」であった。

3-2-2 進化と宗教

進化と宗教について、キッド自身が以下のように問題を設定している。

本当に重要な問題は、信仰が理性に根拠を持つかどうかではなく、社会の進化において果たすべき

機能が宗教制度にあるかどうかである。（p.22）

ここには、宗教を機能としてとらえる観点が見られるが、この問題にまっとうに答えようとするのであれば、「社会の進化」に「宗教制度」が何らかの「機能」を果たしていることを具体的に示して見せなくてはならない。しかし、キッドの記述にそのような証明は見られず、「宗教制度 religious system によって個人の資質は深く影響され、歴史の過程や社会発展のすべての特性も完全に影響を受けている」（pp.20-1）と、証明抜きで、人間の歴史、社会にとっての宗教の本質性が当然の前提とされている。

そして、進化論的な見解からも宗教は基礎づけられるとする。

信仰が社会発展の一要素であるとするれば、ダーウィンに始まる科学革命のもっとも注目すべき結論として、信仰は神学者が夢にも思わなかったほどの広く深い、そして永遠の根拠を持つものとしなくてはならない。（p.23）

if とされた「信仰が社会発展の一要素であるとするれば」という点について、結局のところキッドは何ら具体的な根拠を与えずに、同じ内容の言い換えをたたみかけ、それによって既成事実化できたかのように論を進める。また、「宗教」religion と「信仰」faith という用語が併用されるが、特に意識的な区別はもうけられていない。

なお、この記述で注目されるのは、「宗教」ないしは「キリスト教」を「神学」すなわち「教会」の枠を越えたものとして理解している点である。この点は、無教会を標榜してキリスト教信仰が教会組織の枠にはめられることを嫌った

内村に通じる点である。

さて、キッドは「宗教現象は確かに、人類の社会発展の特徴として我々が見出したもっとも永続的で独特の特徴である」(p.23)として、宗教の有無が他の生物と人間（人間社会）の最大の相違点であるとする。続けてキッドはここでもたたみかける。「この問題に対して近代進化論の立場から公平な知性で取り組む人であれば、進化の過程にとってプラスとなるような重大な機能を信仰が有することを一瞬でも疑うような人はいないであろう」(p.23)。

では、宗教がキッドの言うように人間社会にとって本質的なものであるとして、それはどのような機能を果たしているというのか。キッドは以下のように説明する。

社会の進化において超理性的な制約 ultra-rational sanction を個人の社会的行為に与えないものは、いかなる種類の信仰であれ、宗教としての機能を果たし得るものではない。(pp.108-9)

持って回った言い回しだが、要するに「宗教とは個人の社会的行為における理性の働きを抑制するもの」ということであり、キッドの言う「理性」とは、もっぱら功利性のことであるため、「宗教とは個人の功利的振る舞いを抑制するもの」ということになる。さらに以下のように説明される。

宗教とは、個人の利害と社会有機体の利害とが対立するとき、個人の行為の多くに対して超理性的な制約を与えるものであり、そのことによって人々が集団として進化するため全体としての利益にかなうよう、個人の利害を社会有機体の利害に従わせる信仰のことである。(p.111)

キッドにとっての宗教は、個々人の功利主義的な振る舞いを抑制し、全体の利益に部分・個を服属させるものなのであり、逆に、このような宗教がなければ、その集団は滅び去るしかないとされる。だから、集団の生き残りのためには、是非ともそうした宗教が確立されねばならないということになる。

ところで、このようなキッドの論では、生存競争を生き残るべき単位であり主体となる集団は、スペンサーの用語を借りた「社会有機体」ということになる。では、この競争の主体である社会有機体とは具体的にはどのような集団として把握されるのだろうか。個人が自らの利害を押しやっても奉仕すべき「全体」とは何なのか。

この点についてキッドは、進化する社会有機体を、人種や国家ではなく、「文明」civilization であるとする。そして、キッドの属する「文明」を何らかの地域に関連づけるなら「ヨーロッパ文明」とでも呼ぶほかないが、これは正確でも完全でもなく、「西洋文明」と呼ぶほうがよいとする。

我々が属する文明制度 system of civilization は世界人類の中ではっきりと区分された場所を有するものであるが、それはけっして人種あるいは国家・民族 racial or national としての明確な境界を持つものではない。それはチュートン文明やケルト文明、ラテン文明といったものではない。またそれは、ドイツ文明でもなければフランス文明、イタリア文明、アングロ・サクソン文明でもない。我々がそれを何らかの地域に関連づける権利を有する限りにおいて、それはヨーロッパ文明ということになろうが、この定義も不正確ではないにしても完全とは言えない。我々が属する社会制

度 social system を言い表すのにもっとも適切な表現は一般に用いられているものであろう、すなわち「西洋文明」Western Civilization である。(p.130)

やはり、分かったようで分からない話の持って行き方だが、こうした「西洋文明」に対する宗教の機能は以下のように説明される。

我々の文明は有機的に発達 growth する単一のものとしてとらえられるべきものであり、(中略) その発展過程が引き起こす生存競争は、平等を基礎としてすべての人々を巻き込み、より高いレベルの能率 efficiency を引き出すのであり、この発展の背後に存在し続ける原動力は、我々の文明が身につけるようになった豊かな利他的感情である。そして、この豊かな利他的感情は、我々の文明と結びついた宗教制度 religious system がそれ特有のものとして生み出し続けてきたものである(後略)。(p.261)

ここに、集団にとっての宗教の重要性、そしてそうした宗教を広めることの必要性が結論されることとなる。もちろん、この「我々の文明と結びついた宗教制度」がキリスト教のことであるのは言うまでもないが、カトリックは除外され (p.319)、実質的にプロテスタントのこととなっている。この点で、「西洋文明」にカトリック圏も含めているはずのキッドの論は齟齬をきたしている。ただ、こまかく見るとこうした齟齬はキッドの著作の至るところに存在する。

4 内村鑑三におけるキッドの影響

4-1 「西洋文明の心髄」

以上のようなキッドの考え方に内村が影響されていることが読み取れるのは、まず、1896年7月と11月の「西洋文明の心髄」である(「西洋文明の心髄」1896(明治29)年7月・11月、全集3巻所収)。ここでは、キッドと同様、ギリシャ文明は「智的文明」とであるとされる。そして、この智的文明は個人の修養を促すものではあるが、同時に欲心を高め廉恥心を鈍くし、自己の利害関心を優先させて他者や公衆、社会や国家への配慮を忘れさせるものであるとされる。

これは、ギリシャ文明は知的であるがゆえに、その個人は功利的であって国家と社会への配慮に欠け、自己の利害を全体の利害よりも優先させたために崩壊したというキッドの論と同じである。そして、キッドが文明発展の原動力を宗教に見出したのと同じく、内村は「無究の発達力は智性に存せずして靈性に在り」(全集3巻216頁)と断言する。

また、内村は文明 civilization の語を「市民各其責任を重んじ義務を全ふするの状態を示せし語なり」(全集3巻218頁)と説明し、そうした文明の民とは次のようなものであると解説する。

共同一致に堪ゆる民を言ふなり、故に文明の民とは和合の民と称するを得べし、文明(Civilization)とは共同(Association)と同意義なり、即ち之を近世社会学の語を以て言へば文明は完全なる社会組織なり、個性を有する人類が相依て以て作りし兄弟的団結を言ふなり。(全集3巻218頁)

ここで言う「社界組織」とは、キッドがスペンサーを引用して言う社会有機体 social organism のことであると考えられる。その社界組織の完全なるものとしての文明とその担い手たる「文明の民」を、「共同一致」「和合」「兄弟的団結」という言葉の連呼で形容する内村の文明・社会理解は、キッド以上にキッド的な社会有機体理解を展開させているとも言える。

そして、宗教の役割として内村は以下のように述べる。

宗教の人世を利するは功力ある社界の組成を助くるにあり、個性を有する人類の団合和親を促すにあり、慾心を排除し、名誉心を刪減し、献身奉公の念を起すにあり、慾は破壊的なり（後略）。（全集3巻219頁）

「献身奉公の念」を個人に植え付けることで人類という全体の「団合和親」を実現する、という発想は、個人に義務の観念と利他心を持たせることで全体へ奉仕させようというキッドの論と、個と全体の関係、そしてその両者の媒介という構造としては同じものである。もっとも、全体を「人類」へと広げるか「西洋文明」のみを想定するかという内村とキッドの違いは、それを敷衍すれば本質的な違いに至る可能性が想定される。また、内村はキッドのように「競争」を絶対視していたわけではない。上記の宗教理解に続けて内村は、「真正の進歩は競争より来らず」（全集3巻219頁）としており、安易な「弱肉強食」的な世界観は内村には見られない。だが、ここで内村が個と全体の媒介として宗教の役割を見出していたことは確かであろう。

さらに続けて内村は、文明の進歩のために

「民衆を利せんとするの公義心」と「真理を歓迎するの公共心」が必要であるとする（全集3巻219頁）。「民衆を利せんとするの公義心」が宗教心もしくは宗教が人々に涵養すべき精神であり、「真理を歓迎するの公共心」は科学のことであると解することができる。ここでの内村は、こうした「公義心」と「公共心」の両立として宗教と科学、そしてその科学の代名詞でもあった進化論との接合をとらえていたと言えよう。

そして、内村にとって、このような形での科学との両立を果たす宗教にもっともふさわしく、その実績も有するのがキリスト教であった。内村によると、科学によって迷信と看破されるような宗教を有する民は「進歩発達の民」ではない。しかし、科学の展開によってもキリスト教は破棄されず維持されつづけてきた。欧米社会の生命力はキリスト教にこそあるのであり、「能く新科学の光輝に耐え、是を吸収同化して益々社界の生命力を強ふせしめし者は余輩は基督教を除て他に宗教あるを見ず」、「而も基督教徒は常に最も開導し易き民なり」（全集3巻221頁）ということになる。

だが、内村の見るところ日本人はそうした「開導し易き民」ではなかった。「不動に参し吞竜¹⁵⁾に詣する公衆に対し進化を説き啓発を論ずる事は殆んど絶望的事業なり」（全集3巻221頁）と内村は嘆く。しかし、だからこそ、こうした人々＝日本人にキリスト教を教え広めることこそ、内村自身に課せられた日本人のための急務ということにもなる。

4-2 「世界の日本」

さらに、以上の「西洋文明の心髄」と同時期の「世界の日本」にもキッド『社会進化論』の

影響を見ることができる（「世界の日本」1896（明治29）年9月10日、全集3巻所収）。

内村は、鼻が体の一部であって体が鼻に属すわけではない、というたとえを持ち出し、そのことと同様に、「日本は世界の日本にして世界は日本の属にあらざる」（全集3巻261頁）のであって、自国を世界の中心と考え、世界は自国のために存在するかのようにみなして武勇に訴えようとする類の「愛国論」は、そのことを忘れた妄想であるとする。

内村はこうした「愛国」とは異なった「国家主義」の立場を自分は取るとする。体を健康に保とうとするのは、鼻をよくしようとするのと結局のところ目的が同じであるように、日本が世界の一部である以上、世界主義者であることと国家主義者であることは同じことであるというのである。

余輩は世界主義を取る者なり、日本を世界の一部分として見ればなり、余輩は国家論者なり、日本の利益發達を正当自然の觀察点より攻究せんと欲する者なればなり。（全集3巻262頁）

鼻としての日本をよくしようとするのと、体としての世界をよりよくすることは何ら矛盾しないというわけである。内村は、「善き大なる国家」とは、「最も多く人類進歩の爲めに尽し、世界の改造を助け、大真理と大思想と大事業とを最も多く全世界に寄附せし者」であるとする（全集3巻262頁）。内村はキッドにおける個人と文明との関係を、一国家と全世界との関係に置き直して理解しているのである。

そして、そうした中での個人についての理解もまたキッド的である。内村は、「善き市民」というものは「自己あるを忘れ、国家あるを知

て自己あるを知らざる献身奉公の士」であるとする（全集3巻262頁）。「西洋文明の心髄」において、宗教によって「献身奉公の念」を涵養された者こそが「文明の民」であるとされたのと同様である。

個人と国家、普遍志向のキリスト教徒であることと日本への愛国主義、という葛藤を、世界主義（普遍）の一部としての日本、という大きな枠の中に位置づけ直すことによって、内村はより大きな全体への「愛国」を見出し、この葛藤を乗り越える糸口を見出していたといえよう。

結び

国家やある一定の地域社会など何らかの人間集団を一つの生命体としてとらえ、そうした生命体の生存競争として現実をとらえる社会進化論の発想からは、全体としての社会の進化や生き残りが大きな課題となる。

スペンサーにおいては、自由な競争を徹底させることが優先されたため、集団の中での個人、すなわち全体の中での個の自由が抑圧されることは否定された。それに対してキッドは、全体の生き残りのために個人が犠牲となることは当然であるとした。そしてそのキッドにとって「西洋文明」であった全体は、内村においては「日本」さらには「世界の中の日本」と読み換えられていった。

こうした全体に対して個をどのように媒介するかについては、キッドの場合、個と全体を宗教でつなぐ、すなわち「西洋文明」とのつながりが自明とされたキリスト教を持ち出せば済んだ。だが、内村の場合、事はそう簡単ではなかった。個と全体を宗教でつなぐのはよいとし

て、内村にとってその宗教にあてがうべきキリスト教は、内村にとっての全体である日本とは齟齬をきたすもの、あるいは齟齬をきたすものとして非難攻撃されるものであった。そのため、内村は全体としての日本をさらなる全体である世界の中に位置づけ直す作業を必要とした。

内村は、キッドにおける社会有機体としての宗教の機能、すなわち西洋文明としてのキリスト教の役割に、世界の中の日本に対してキリスト教が果たすべき役割、さらにはそのために自らが果たすべき使命を見出していたといえる。そしてそこに、JesusとJapan、キリスト教信仰としての宗教と日本への愛国心をつなぐものを見ていたととらえることができる¹⁶⁾。しかもキッドの論は、宗教と愛国心とともに、内村にとってのもうひとつの課題であった、科学としての進化論との調和的な関係をも示唆してくれるものであった。

このように内村が「はまった」キッドの広範な読者の中には、夏目漱石もいた。ただし、内村と違って漱石はキッドに対して冷淡である。漱石にまともなキッド論があるわけではないが、蔵書に収められていた『社会進化論』や『西洋文明の原理』の余白には痛烈な言葉が書き込まれている。たとえば、『社会進化論』への書き込みでは、キッドの論述の進め方について「愚論」¹⁷⁾であると、言い換えをたたくみかけるだけで論証に乏しい書き方については、「此位ナ議論デハ証拠ニナランデハアリマセンカ」¹⁸⁾と憤慨している。キッドが進化における宗教制度の機能を主張している部分についても、「Poor souls!」¹⁹⁾と、漱石は書きつけている。

このような違いに漱石と内村のパーソナリテ

ィヤ知性のあり方の相違を見ることもできるかもしれない。また、内村はキッドの文章に自らの思いや悩みを投影しすぎていたのかもしれない。だが、こうしたキッドに対する距離感の差は、内村が置かれた状況の厳しさや抱えざるを得なかった葛藤の深さを際立たせているとも言えよう。

宗教＝キリスト教の重要性、必要性とは何か、という問題を抱えていた内村にとっては、キッドの論理的というよりは扇情的な文章が、先に見た新渡戸宛書簡の「結局のところ、変わる事のない古くさいキリスト教の聖書のうちに、人間の魂の救いだけではなく国々の救いもまたあるのだと僕は思う」（全集36巻425頁、拙訳）という興奮を呼び起こすものとなった。そして、この興奮の中で、キッドにおける「西洋文明」についてのキリスト教の重要性が、内村にとっては、「国々」についてのキリスト教の重要性、さらには自らが忠誠を誓った日本についてのキリスト教の必要性へと読み換えられてゆく。そうした必要性が切迫したものとして内村に感じられたからこそ、同時代日本とのズレもまた顕著となり、やはり新渡戸宛書簡にあるように、「それほど不可欠であるにもかかわらず、聖職者になることを恥じねばならないのだろうか」（全集36巻425頁、拙訳）と、こぼすことにもなったと言えよう。

付記

本稿は、科学研究費補助金・若手研究（B）「社会進化論の影響を軸とした、近代中国と日本におけるナショナリズムと宗教の比較研究」研究課題番号：23720031（代表者：住家正芳）による成果の一部である。

また、本稿は国際政治学会2012年度研究大会での発表をもとにしたものであり、分科会主催者である

宮崎悠氏（北海道大学）やコメンテーターの西谷修氏（東京外国語大学）をはじめとする方々から有益なご意見をいただいた。記して謝したい。

注

- 1) 日本における代表的な研究として、深澤英隆『「宗教」概念と『宗教言説』の現在』（島蘭進・鶴岡賀雄編『〈宗教〉再考』ペリかん社、2004年）、同『啓蒙と霊性』岩波書店、2006年がある。磯前順一『近代日本の宗教言説とその系譜』岩波書店、2003年や、藤原聖子『「聖」概念と近代』大正大学出版会、2005年も基本的な参照文献となっている。その他にも数多くの著作があるが、それらを手際よくまとめた最近のものとしては、星野靖二『近代日本の宗教概念』有志舎、2012年がある。なお、「宗教とは何か」と「宗教はどのようなものとされてきたのか」といった言い回しの対比による学術的変遷の解説は多くの人によってなされているものであり、星野i頁にもあり、参考にした。
- 2) 内村のJapanへの忠誠は、ナショナリズムの多様な諸形態のうちの一つのあり方を示すものであると考えられる。よって、内村のJapanへの忠誠をナショナリズムのひとつとして論じることが可能であろうし、そのように表現した論考もある。たとえば、渋谷浩『近代思想史における内村鑑三』新地書房、1988年、188頁。だが、ナショナリズムという表現を内村の思想に冠することは、ナショナリズムが多様である分、語弊を含むおそれがあるため、本稿では内村のJapanへの忠誠を、「愛国」「愛国心」として表現しておく。
- 3) 井上哲次郎『教育ト宗教ノ衝突』敬業社、1893年、14頁。
- 4) 内村鑑三『内村鑑三全集』岩波書店、1980-1984年からの引用については、初出時に表題を掲げ、本文中に巻数と引用頁を示す。なお、内村の生涯については、鈴木範久『内村鑑三の人と思想』岩波書店、2012年を参照。
- 5) 引用は、山本泰次郎・内村美代子訳「余はいかにしてキリスト教徒となりしか」『内村鑑三集 近代日本思想体系6』筑摩書房、1975年、47頁。なお、この講演の日付は引用した太田稲造・宮部金吾宛書簡では1月8日となっており、1895年に出版された*How I Became a Christian*で1881年11月12日とされているのは内村の記憶違い。鈴木範久『内村鑑三日録 1861-1888 青春の旅』教文館、1998年、114頁、118頁参照。
- 6) 武富保『内村鑑三と進化論』キリスト教図書出版社、2004年。なお、本稿は同書から多くを得ており、同書にキッドの原文との対照を補ったものとして位置づけられる。
- 7) ただし、社会進化論という用語には、指示する内容のあいまいさや自由放任主義者に対する悪口めいたレッテルであったなどの問題点が指摘されている。ピーター・J・ボウラー『進化思想の歴史 下』朝日新聞社、1987年、457頁参照。たしかに、以下でもふれるように、同じく「社会進化論者」とされるスペンサーとキッドの間にも違いがある。だが、重要なのはレッテルの放棄ではなく、レッテルの内実の検討であろう。19世紀末、ダーウィンよりもむしろスペンサーの「適者生存」*survival of the fittest*という言葉が発火点となって、生命を持つひとつの有機体として社会をとらえ、その社会に生物進化の法則を適用することが可能であることを前提とした一群の思想が流行したことを指して社会進化論の語を用い、研究領域を設定することは有意義であると考えられる。
- 8) キッドの『社会進化論』の影響力について富山太佳夫は以下のように述べている。「アメリカは別として、すでにイギリス国内では影響力の小さくなっていたスペンサーの社会進化論にかわって、一般の人々に社会の進化を説くのに決定的な役割を果たしたのはこの本だと述べても、決して過言にはならないだろう。」富山太佳夫『ダーウィンの世紀』青土社、1995年、218頁。
- 9) キッドについての包括的な研究としては、D.P. Crook, *Benjamin Kidd: Portrait of a Social Darwinist*, Cambridge: Cambridge University Press, 1984がある。キッドの経歴と著作の概要について知るには、宮本盛太郎・関静雄『夏目漱石』ミネルヴァ書房、2000年、144-194頁が有

- 用である。
- 10) Benjamin Kidd, "Sociology," *Encyclopedia Britannica 11th ed.*, New York: The Encyclopedia Britannica Company, 1910-1911. 以下、キッドの著作からの引用は本文中にページ数のみを示す。
 - 11) たとえば、『ブリタニカ国際大百科事典 小項目事典2』テイビーエス・ブリタニカ, 1973年, 274頁掲載のベンジャミン・キッドの項目。
 - 12) ただし、これは必ずしも「弱者」の切り捨てを意味するわけではない。自由であるからこそ個人は努力してみずからを変化させ、外部環境の変化に適応した「適者」になり得るとというのがスペンサーの基本的な考えであった。だからこそスペンサーは、国家は外交のみに役割を限定すべきであり、福祉や教育、貧民救済といった内政には介入すべきではないとした。ポウラー前掲書, 463頁参照。
 - 13) 武富, 38頁。
 - 14) 使用した版は, Benjamin Kidd, *Social Evolution*, New York: Macmillan, 1898. (University of California 収蔵本をオンライン PDF 化したものを利用。Hathi Trust Digital Library, 2012年6月28日取得, <http://catalog.hathitrust.org/Record/007700274>) 以下の引用は、この版のページ数を示す。なお、同書には角田柳作訳『社会之進化』開拓社, 1899年と佐野学『社会進化論』而立社, 1925年の2種類の邦訳があるが、引用はすべて拙訳。
 - 15) 呑竜とは、内村が幼少期を過ごした群馬県にある安産・育児の願掛け寺である大光院のこと。
 - 16) ただし、これが内村にとっての最終的な答えであったわけではない。先に引いた「余は四十年前に、札幌に於て二三の大問題を提供された」という回顧のすぐ後で内村自身が「斯かる大問題を提供されて未だ完全なる回答を得ず」（全集34巻240頁）と述べている。実際、内村の思想はキッドの影響を受けた後も変転を続けてゆく。
 - 17) 夏目金之助『漱石全集 第二十七巻』岩波書店, 1997年, 168頁。夏目漱石によるキッドの著作への書き込みについては、宮本盛太郎・関静雄前掲書, 218-219頁および、佐々木英昭「Poor souls! 漱石の宗教批判」（『漱石全集 第二十三巻 月報24』岩波書店, 1996年）を参照。
 - 18) 同, 171頁。
 - 19) 同, 167頁。

Kanzo Uchimura and Social Evolutionism : The Influence of the Works of Benjamin Kidd

SUMIKA Masayoshi *

Abstract: In this article, I examine the influence of the works of Benjamin Kidd on Kanzo Uchimura's understanding of state, religion and evolution. By comparing Kidd's and Uchimura's ideas on religion, I argue that social evolutionism (or social Darwinism) influenced early modern Japanese ideas on religion. According to Uchimura himself, the harmonization of Christian belief, patriotism, and evolutionary thought was his lifelong project. His devotion to Jesus and Japan are widely known as "the two Js," but the dilemma between belief and patriotism not only caused him intellectual distress but also actual problems in the form of an incident that occurred at the First High School. Through his life, Uchimura sought a way to resolve this dilemma, and found clues on how to accomplish this in the works of Benjamin Kidd. Today, Benjamin Kidd is virtually unknown, but in the late 19th century he was a well-known sociologist and received attention at the beginning of the 20th century as the author of the international best-seller *Social Evolution*. Uchimura was profoundly impressed by *Social Evolution* as well as an article on sociology found in the 11th edition of the *Encyclopedia Britannica* also penned by Kidd. In these writings, Kidd showed that religion had played a significant role in the course of human evolution and Western civilization. Uchimura recognized the harmony between religion, patriotism, and evolution expressed in these works and developed his own thought based on these ideas. Uchimura's reception of Kidd's works shows one aspect of the impact of social evolutionism on early modern East Asia, and is a useful case for the investigation of the genealogy of religious ideas and the development of the concept of religion in modern Japan.

Keywords: Kanzo Uchimura, Benjamin Kidd, Social Evolutionism, Social Darwinism, Genealogy of Religion.

*Associate Professor, Faculty of Social Sciences, Ritsumeikan University